

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	第61回日本感染症学会東日本地方会学術集会:東邦大学における感染症教育・診療・研究のさらなる飛躍に向けて
別タイトル	61st Annual Meeting of Eastern Japan Branch of The Japanese Association for Infectious Diseases: Further development of clinical practice, research and education in infectious diseases field of Toho University
作成者(著者)	館田, 一博
公開者	東邦大学医学会
発行日	2012.09
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 59(5). p.225 225.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	巻頭言
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.59.225
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD00028001

第61回日本感染症学会東日本地方会学術集会 —東邦大学における感染症教育・診療・研究の さらなる飛躍に向けて—

館田 一博

東邦大学医学部微生物・感染症学講座教授

この度、第61回日本感染症学会東日本地方会学術集会・第59回日本化学療法学会東日本支部総会（東海大学 金子明寛教授）の合同学会を2012年10月10～12日（会場：ホテル日航東京）の3日間、“感染症学の学際的发展を目指して”をメインテーマに開催させていただくことになった（<http://www.societyinfo.jp/godo2012/>）。今回は第95回日本細菌学会関東支部総会（東京慈恵会医科大学 水之江義充教授）との同時期開催で行われる。3学会の連携は、2003年に山口恵三先生が主催された合同学会が最初であり、2010年の同時期開催に続き第3回目となる。

近年、多剤耐性菌の出現と蔓延、院内アウトブレイク、新興再興感染症など感染症に関する課題が次々と出現し大きな問題となっている。一方、新しい治療薬開発の流れは減速し、その予防法や治療法に大きな進展が見られていないのが現状である。このような状況を打破するためにも、医学・歯学領域だけでなく、薬学・農学・工学・理学などさまざまな分野の研究者が集結し、感染症の病態・診断・治療・制御に関して最新の情報・知見を共有することは極めて重要かと思われる。「感染症」をキーワードに学際的な交流が促進され、次世代の感染症学的发展につながるヒントが生まれればという願いから、本テーマが掲げられた。

また本学会においては、若手人材の発掘と育成も大きな目標と考え、プログラムを企画させていただいた。これまでの感染症学・化学療法学・細菌学の歴史をしっかりと継承しながら、若い人材の参加と新しい発想の導入により、本学会のさらなる発展が進むものと確信している。若手の先生方は、ベテランの先生方から多くのことを学んで欲しいし、また自分の経験や考えを遠慮なく発言して建設的な議論を展開していただければと思う。本学関係の先生方として、本間 栄先生には教育講演（難治性呼吸器疾患と感染症）、シンポジウムとして渋谷和俊先生（症例から考

る真菌症）、川合真一先生（生物学的製剤が感染症診療に与えるインパクト）、草地信也先生（外科感染症：難治化・重症化の真実）、吉原克則先生（救急/ICUが抱える感染症の諸問題）にそれぞれご企画いただいている。また吉澤定子先生にはシンポジウム“進化するMRSA, 追いかける抗MRSA薬”でリネゾリドに関する興味深い知見を発表していただくことになっている。その他、「抗菌薬適正使用セミナー」、「症例から学ぶ感染症セミナー」、「ICD講習会」など多数の教育企画が予定されているので、多くの研修医や大学院生・学生が参加して下さることを期待している（学生・大学院生は無料!）。また会員懇親会では、東邦フィルハーモニーに是非演奏をお願いしたく、調整を進めている状況である。

今回、第61回日本感染症学会東日本地方会学術集会を開催させていただくという名誉をいただき、改めて本学の感染症学の歴史、歴代の先生方の偉大さを実感している。桑原章吾先生、五島瑳智子先生、そして山口恵三先生によって築かれた教室を継承させていただいたことは大変光栄であり、また同時に大きな責任を負っていることも自覚している。炭山嘉伸理事長が立ち上げた外科感染症学の大きな流れに後押しされていることも強く実感している。本学の感染症学をどのように発展させることができるのか、大森・大橋・佐倉病院の先生方のお力をいただきながら、また理学部・薬学部・看護学部の先生方と連携し、“ALL TOHO”で前進していくことが重要であろう。少しずつではあるが、感染症に興味を持ってくれる学生が増えていることが幸せであり、彼らのためにもさらに充実した感染症学を実践していかなければいけないと感じている。東邦大学で学んだ学生の中から、世界をリードする研究者が育ってくれることを夢見て・・・そんな思いを込めてこの学会を企画させていただいた。